Setouchi Triennale 2022

瀬戸内国際芸術祭2022

瀬戸内国際芸術祭2022春会期に、
香川大学が出展する
「瀬戸内の伝統生活文化・芸術発信プロジェクト」。
若井健司教育学部副学部長が、
今回のプログラムに込めた思いを語ります。

これまで育んだ人の輪をフルに活かす晴れ舞台

今回のプロジェクトは、四国村の農村歌舞伎舞台が会場となります。テーマは大きく2つ。四国で初めてのオペラ作品「二人奥方」の復活上演と、讃岐三白をはじめとする地域産業の生産現場で古くから歌われる「瀬戸内仕事歌」。私たちの伝統的な生活文化から生まれた音楽の再現です。現代芸術・美術に重きを置く瀬戸内国際芸術祭において、「音楽」「地域」を色濃く打ち出すプロジェクトが取り上げられるのは、なかなか珍しいのではないでしょうか。

瀬戸内仕事歌
Work songs of Setouchi &
四国最古の民話オペラ「二人奥方」

香川大学 瀬戸内の伝統生活文化・芸術発信プロジェクト

2022年5月15日(日)予定
15:00(1回目) 18:00(2回目)
代表:若井 健司
場所:四国村(四国民家博物館)
https://www.kagawa-u.ac.jp/cooperation-community/local/27076/28036/

最新の情報はこちらのQRから

四国から世界へ、伝統的生活文化を発信

私は2004年から始まった「高松オペラシティ」構想の下、地域芸術の振興に尽力してきました。声楽家として活動しながら、瀬戸内海を舞台とする源平合戦絵巻オペラ3部作構想の実現をライフワークとしています。1作目のオペラ『扇の的』は、2014年サンポートホール高松開館10周年記念の初演から2018年ブルガリア国立歌劇場招聘公演まで、国内外で複数回の講演の機会を得て、いずれも成功を収めました。

2021年2月には、舞台と客席の間に薄い「紗幕」を降ろしてオペラ映像を投影し、演者の生歌とともに臨場感を高める「オペラ・ガラ・スクリムコンサート」を試験的に行い、新たな演出法として一定の手応えを感じているところ。この手法は、作品をより深く味わえるだけでなく、ステージをマスクのように覆うイメージなので、感染症対策として観客の不安も軽減できると考えています。同じ手法を芸術祭の舞台で採用するかはまだ検討中ですが、こうした様々な活動を通じて培ったノウハウと、芸術文化振興に積極的な地域の人たちのつながりを、芸術祭でもしっかり活かすつもりです。コロナ禍で舞台表現の場が少なくなったとはいえ、野外舞台なら感染症対策もしやすいし、客席数も半分以下に抑えますから、実現性はかなり高いと思います。

四国村そのものも、現在エントランス付近のリニューアル工事が進んでいて、4月には完成予定と聞いています。このプロジェクトが上演される5月には、新たに生まれ変わった姿で皆さんをお迎えすることになるでしょう。

地域に伝え残したい「生」の音楽の息吹

大学生の頃の教育実習で、教科書にない授業をしようと思い、「讃岐の民謡」という1枚のレコードを手に入れたんです。ところがそれは民謡だけでなく、実際にその仕事をされている方の仕事歌が入っていて、芸術性を追求する音楽とはまた違った「生」の響きに、私はすっかり魅了されました。仕事歌から垣間見える過去の人々の文化や暮らしぶりは、私のライフワークである瀬戸内で繰り広げられた源平合戦のオペラ制作にも深くつながっているように思います。

私たちが日頃耳にするのは「聞かせるための音楽」ばかりですが、仕事歌は「自分・仲間のために発する声の音楽」です。人間が作業に必要な、均一な身体リズムを刻むうちに、感情・願いが言葉・声として自然と生まれる。それが本来の歌の姿かもしれません。それらはまた、歌う人たちが口承でどんどん変化させて伝わっています。

私は声楽家としてオペラにかかわる傍ら、教育学部の教員として

受け継がれた「声」が、舞台の上でリアルに息づく

初演から半世紀経ったオペラと、
労働の場で歌い継がれた歌。
地域で生まれた「声」は
世界の人々の心にどう響くのか？

原和裁専門学院
院長
原 タヱ子

香川大学教育学部附属
高松小学校講師
ソプラノ歌手
國方 里佳

原和裁専門学院での衣装合わせ

砂糖しめ機

四国村事務局
門脇 聡子

四国村の農村歌舞伎舞台前で打ち合わせ

こうした仕事歌を教育現場に残したいとも思っているんです。昔のように世代を超えて地域に伝わる歌が少なくなり、かつての町の形や歴史が薄れていく中、仕事歌は貴重な存在。芸能性が伴う民謡と違って、仕事歌は歴史と生活そのものを象徴する、音楽だけではない総合学習の題材です。歌い手がほとんどいなくなってしまった今、せめてそれを見たことがある人たちがいる間に再現したい、というのが今回の試みです。

会場である四国村には、四国の各地から移築された伝統的な建物が点在し、中には砂糖しめ小屋やこうぞ蒸し小屋、漁師の暮らしが垣間見える旧吉野家住宅など、四国の伝統的な地域産業に深くかかわるものも少なくありません。仕事歌が歌い継がれてきたであろう「場所」の息吹を身近に感じることができる、またとない舞台となるでしょう。

上演においては、牟礼町の石切り唄保存会、さぬき民謡保存会をはじめ、地域で伝統文化の保存に取り組む多くの皆さまのご協力をいただきます。「石切り唄」「砂糖しめ唄」「麦打ち唄」「地つき唄」「仁尾網引き唄」「伊吹島舟唄」「浜曳き唄」を、当時の労働風景を思わせる演出とともに披露する予定です。最後に演じる塩づくりの仕事歌に現代舞踊を絡めて、オペラへと自然に空間をつなげていく構想です。

仕事歌の再現にご出演いただく皆さまは、これまでの地域での保存活動において発信力や後継者の課題も感じておられるようですが、この芸術祭はローカルから一気に世界へ理解を広げていけるチャンスといえます。その意味でも、四国村という当時の生活環境がイメージしやすい場所で上演できるのはとても意義深いこと。瀬戸内という場所・土地に根差したコンテンツを違和感なく発信できると期待しています。

半世紀を経て甦る四国最古のオペラ

舞台は四国の山中の小さなお城。ある朝お殿様が目覚めると、奥方が2人になっていたところから始まるオペラ「二人奥方」。まるで見分けのつかない2人のどちらがキツネの化けた姿なのか、大騒動の顛末は「なぜ四国にキツネがいないのか」の由来につながっていきます。

40分ほどの短い作品で、四国の民話から新たな音楽芸術を発信しようと、半世紀前の県内の若手演奏家・愛好家が集まる「香川二期会」が制作したものです。脚本は人形劇の作家兼演出家・瀬川拓男、作曲は東京を拠点に創作オペラや人形劇オペラを手掛ける菅野浩和、演出は香川演劇界の重鎮・八木亮三という布陣で、同会10周年記念公演として1965年に初演した記録が残る、おそらく四国最古のオペラ作品です。

私が八木さんから「初演後は一度も再演されていない。いつかもう一度上演したい」という熱い思いを聞いたのが、2003年のこと。そこから私自身もいろいろ調べて、2018年には論文を書き、学内での試験的再演を経て、今回の芸術祭でついに再演を目指せることになりました。少々教訓的な内容ではありますが、陰惨な話も多い四国の民話の中ではなかなか楽しくて痛快な場面が多く、アクションシーンなどもあって、芸術祭のような晴れの祭典にはぴったりの演目です。

屋島中学校合唱部をはじめ地域の幼稚園や芸術団体などにも広く協力してもらい、プロ・アマチュア一体でつくる舞台になります。歌い手には県内を代表する声楽家を起用し、香川大の教員・学生がアンサンブルや舞台美術を担当します。使用する舞台衣装は、主に『扇の的』などでもお世話になった、衣装の時代考証の見織の深い原和裁専門学校の原タヱ子先生にご協力いただきます。日本の伝統的な着物文化に興味を持つ海外の人たちに向けた発信にもつながるでしょう。照明・音響スタッフは、四国村農村歌舞伎舞台での公演事業にかかわった経験があり、ガラ・スクリム・コンサートも担当してくださった方。今回も組むことができて、非常に心強く思っています。

瀬戸内海に雄々と突き出した屋島のふもとの四国村という舞台に恵まれ、これまで育んできた地域の人の輪があってこそ、今回のプログラムは実現します。私たちが生きる地域の伝統文化の価値を認め、新しく再生させるのも私たちの役目だとも感じています。まずはぜひとも芸術祭を成功させて、四国村でさらにたくさんの芸術が花開いていくよう願っています。

教育学部 副学部長
若井 健司
わかい けんじ

香川県高松市出身。専門は声楽・音楽教育・地域芸術。テノール歌手。四国二期会理事長。東京芸術大学音楽学部声楽科卒業。同大学大学院音楽研究科声楽専攻修了。2020年から現職。

協力団体一覧

公益財団法人四国民家博物館「四国村」／学校法人のぞみ学園のぞみ幼稚園（屋島地区）／高松市立屋島中学校合唱部／四国二期会／讃岐民謡保存会／石切り唄保存会／桑山会宇多津社／現代舞踊研究会「土曜族」／原和裁専門学院／認定NPO法人農村歌舞伎祇園座保存会／一般財団法人宇多津振興財団「うたづ海ホタル」他